

非人称のエス

ーフロイト精神分析における理論と実践のずれをめぐるー

後藤 悠帆

1. はじめに

1938年、S.フロイト (Sigmund Freud 1856-1939) は自らの死により未完に終わる「精神分析概説 (Abriß der Psychoanalyse)」のなかで、「エス Es」をめぐる次のような言葉を書き残している。人の発達史において、「もともとはすべてがエスであつたのであり、自我は、外界からの継続的な影響を通じてエスから発展してきたものである。このゆつくりとした発展の間に、エスのある内容は前意識状態に変わり、そうして自我の中に受け入れられた。他のものは、エスの中で変わることなく、近づきがたいエスの核 (dessen schwer zugänglicher Kern) として留まつた (強調——引用者)」(G.W., Nb : 85/全、二二 : 一九八——一九九)。

もともとはすべてであつたところの「近づきがたい核・エス」。エスをめぐるこの記述は、フロイトが精神分析の治療実践の目標を端的に示した、「かつてエスがあつたところに、自我を成らしめる (Wo Es war, soll Ich werden)」(G.W., 15 : 86/全、二一 : 一〇四) という言葉と、その内容においてずれをはらむのではないだろうか。エスの核は、近づくのが困難であるとされる以上、自我に成らしめることが不可能であると予想できるからだ。

しかし、フロイトによる心的装置の理論的探求を振り返れば、第一局所論と第二局所論とのあいだにも、「無意識的なもの」をめぐるひとつの大きな断絶があることが想起されるだろう。つまり、自我という「私」に抑圧された「無意識」の性格と、エスの非人称的性格とのずれである。こうした「無意識的なもの」の見解の変遷は、当然、フロイトが技法論のなかで詳論した「無意識の意識化」を目指す精神分析の実践に対しても大きな影響を与える。本稿の目的は、第一局所論、第二局所論、そして「エスの核」へと至るフロイトの心的装置についての見解の変遷に見出されるずれ (理論内でのずれ) と、そのような「ずれ」をはらむ理論と実践とのあいだのずれ (理論と実践のずれ) を、二つの「ずれ」の位相の差異に注意しながら正確に把握することである。さらに、これらの「ずれ」を原因として理論が実践に課することになる、エスをめぐる内容の異なる二つの要請を、フロイトのテキストから導き出したい。

以上の問いにこたえるために、本稿は哲学の領野から精神分析に取り組んだ、P.リクール (Paul Ricœur 1913-2005) の論考を手がかりとする。その理由は、第一に、リクールはフロイトの技法論の緻密な読解をとおして、実践に初期から一貫して通底する「物語制作」の契機を抽出し、そのうえで実践と理論との接点を丁寧に検討したからである。第一局所論に焦点を当てたリクルールの思索の成果を批判的に読み解くことで、本稿は第二局所論と技法論とのあいだに見出

される、理論と実践の重要なずれを浮き彫りにする。第二に、リクールは精神分析における「無意識の意識化」を、「人間形成 Bildung」の契機として捉える視座を提示しているからである。「無意識の意識化」を主題のひとつとする本稿は、リクールを参照することで、フロイトの「教育」についての思索を検討するための重要な足掛かりを作ることができるだろう。

論述の流れは以下の通りである。第一に、フロイトの技法論を検討して、精神分析の実践に通底する特徴を明らかにする。第二に、第一局所論を検討して、それが精神分析の実践の特徴を明晰に理論化していることを示す。第三に、第二局所論を検討して、「エス」の登場により理論と実践とのあいだに生じるずれを明らかにし、その結果として理論が実践に課することになる、非人称のエスをめぐる二つの要請を導き出す。最後に、「エスの核」をめぐる言及を検討して、フロイトが晩年に到達したエスの思想が実践に与える衝撃の深さを考察する。結論として、エスをめぐる二つの要請にともにこたえる新たな「主体」を構成する実践のあり方が、今後の検討課題として明らかになる。本稿の考察は、心的装置についての理論的な探求と、自己の実存の〈意味〉の喪失に苦しむ人々に日々向き合う治療実践との双方に身を置きながら思索したフロイトが直面した問いを、明瞭に浮き彫りにすることになるだろう。

2. 理論と実践をつなぐ第一局所論

精神分析における理論と実践とのずれの解明を目指して、本章では第一に、リクールの指摘を手がかりにしてフロイトの技法論を検討し、精神分析の治療実践に初期から一貫して通底する被分析者の「物語制作」の契機を抽出する。第二に、フロイトが「エス」の前身である「無意識」概念を論じた第一局所論を検討し、それと実践との接続点を明らかにする。

2.1. 〈反芻処理〉：実践を貫く「物語制作」の契機

フロイトが創始した精神分析の治療実践の目標は、常に「無意識の意識化」にあった。フロイトは1915年の論文「無意識 (Das Unbewußte)」において、意識の質的区分からなる心的装置の第一局所論 (意識・前意識・無意識) を提示する。第一局所論では、意識と無意識との関係は、抑圧する自我と抑圧されたものとの対立として把握される。この枠組みのもと、実践では被分析者が抑圧された無意識を想起し意識化することが目指された。「無意識の意識化」という目標は、1923年の著書『自我とエス (Das Ich und das Es)』のなかで新たに第二局所論 (自我・エス・超自我) が導入されたのちも、大枠において変わることではなかった。「無意識」の質を引き継いだ「エス」と自我との目指されるべき関係を、フロイトは『続・精神分析入門講義 (Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse)』のなかで、「かつてエスがあったところに、自我を成らしめること」(G.W., 15: 86/全、二一: 一〇四) とまとめる。

それでは精神分析の実践のなかで、無意識の意識化とは実際にどのようなことになるのか。リクールは精神分析論のなかで、「無意識の意識化」とはフロイトが「反芻処理 Durcharbeiten」とよぶ行為により遂行されるとのべる。〈反芻処理〉は、フロイトの1914年の技法論「想起、反復、反芻処理 (Erinnern, Wiederholen und Durcharbeiten)」に登場する重要な術語であり、被分析者が分析家による解釈を受け取りながら、自己の抵抗を直視して意識化を目指しそれを克服するための作業を意味する。この長く苦しい作業を続けることにより、被分析者は抵抗を培って

いる抑圧された欲望を発見することができる (G.W., 10 : 136/全、一三 : 三〇六)。リクールは、この〈反芻処理〉を治療実践の中核に位置づけるのだが、そのうえで彼は、〈反芻処理〉とは「記憶への道を再び開く」(1977:843) ことを目標にした、「物語の制作」にほかならないという¹。なぜリクールは、〈反芻処理〉のなかに物語制作の契機を見て取ったのだろうか。

リクールの主張の妥当性を確かめるべく、彼が引用していないフロイトの晩年の技法論「分析における構築 (Konstruktionen in der Analyse)」(1937) を参照したい。この論文でフロイトは、治療において求められるものとは、「患者の忘れられた歳月の、本質的な部分すべてにおいて完全な信頼に足る像」(G.W., 16 : 44/全、二一 : 三四三) であると言明する。いいかえれば、分析の目標とは、被分析者という「主体」自身の自己の実存の〈意味〉の獲得であると言い切るのである。分析を受ける以前の被分析者は、自己自身にとって不快な情動を帯びた表象を無意識へと抑圧する。その結果、自己の人生史の本質的な部分に欠落が生じてしまう。しかし、抑圧された欲望はその力動性を失うことはなく、夢や症状、転移として回帰する。分析家はそれら抑圧されたものの〈意味〉を解釈して伝達し、被分析者は伝達された解釈を吟味し、自身の抵抗を意識化しようと取り組む。こうして想起された記憶から両者が共同して事後的にひとつの人生史を制作し直していくのが、精神分析という営みの根幹である (G.W., 16 : 47-48/全、二一 : 三四六-三四七)。リクールが〈反芻処理〉のうちに見て取った物語制作の契機とは、精神分析のこのような性格にほかならない。

さらに〈反芻処理〉は、被分析者の疎外を克服するだけでなく、フロイトが「教育」の中核として捉えた「快原理の克服と現実原理によるその代替」をも目指す (G.W., 8 : 236/全、一 : 二五六)。快原理に支配された無意識の欲望は、自我の子ども時代の古代性がしみこんでいる。それを意識化するということは、抑圧されたものの〈意味〉を再び獲得し、時間的に秩序づけるだけでなく、それを自我のうちに引き入れることで現実原理の支配下へと移行させることをも含意する。このように「無意識の意識化」は、リクールが指摘するとおり、自我が自己を規定する欲望の古代性を克服して大人へと成熟すること、つまり、「人間形成 Bildung」の契機もはらんでいるのである (1965:503=1982:574)。

無意識の意識化を介した自己の人生史の再構築としての精神分析。これは、フロイトが論文「分析における構築」の末尾において、『ヒステリー研究 (Studien über Hysterie)』(1895) のなかの「ヒステリー者は、主に回想に苦しんでいる」(G.W., 1 : 86/全、二 : 一一) という言葉を引用しているとおり、精神分析の実践に初期から一貫して通底している目標である。分析家の課題とは、物語の断片的な素材からそれらの「元の編成を推測して合成する」こと、すなわち、記憶を連続した物語へと再び組み合わせることであると、その書のなかでフロイトははっきりと述べている (G.W., 1 : 296/全、二 : 三七二)。

以上の技法論の検討から明らかにされたように、精神分析の実践は物語制作の契機、すなわち、無意識の意識化を介した被分析者の人生史の再構築という一貫した特徴を保持していた。こうした実践が、「無意識的なもの」をめぐる見解の修正を繰り返した理論とどのような接点をもつのか、あるいはずれをはらむのか。その答えを求めて、次節ではフロイトがエスの前身である「無意識」概念を本格的に論じた第一局所論を検討したい。

2.2. 技法論と第一局所論の接続点

フロイトは、精神分析の実践が目指す獲得物とは被分析者の自己の実存の〈意味〉であると明言していた。しかし、そもそも解釈や意識化を経て〈意味〉の獲得が目指される「無意識」とは、一体何を言い表しているのか。論文「無意識」のなかでフロイトは、「心的な出来事を、力動論的、局所論的、そして経済論的な諸関係に従って記述すること」(G.W., 10 : 281/全、一四 : 二三〇)を自らの心理学理論の方法論として掲げ、「無意識」概念を形作っていく。本節では、フロイトが第一局所論を詳細に論じた「メタサイコロジー諸篇」の検討をとおして、心的装置をめぐる理論が、実践の営みを論じる技法論とどのように接続されるのかを検討する。

フロイトは、心的装置内部の系としての意識や無意識を、前述の三つの観点から叙述していく。力動論とは抑圧の動性を、局所論とは抑圧により線引きがなされる意識の質的区分を指す。本節で焦点を当てたいのは、無意識をめぐる第三の経済論という見地である。

経済論とは、「心的エネルギー」という「物理化学的な力」を想定し、その変遷として心的現象を説明する理論の見地である²。この心的エネルギーこそ、フロイトが「欲動 (Trieb)」とよぶことになるものである。フロイトは、この経済論的見地を保持していたからこそ、論文「無意識」の「Ubw 系の特別な特性」と題された第五章のなかで、無意識の内実をエネルギー論的な語彙で叙述することができた。フロイトによれば、「Ubw の核 (Der Kern des Ubw) は、その備給を放散させようとしている欲動代表 (Triebrepräsentanzen)³から、すなわち欲望の蠢きから成り立っている」(G.W., 10 : 285/全、一四 : 二三四)。フロイトはそれに続けて、これらの「欲動の蠢き (Triebregungen)」は、互いに影響をうけずに並存し、矛盾を起こすことがないとのべる。無意識のなかでは、心的エネルギーの「備給 (Besetzung)」の大きな可動性が支配しているのであり、そこでは内容がより強く備給されているか、あるいはより弱く備給されているかということしかない (G.W., 10 : 285/全、一四 : 二三五)。

しかしながら、このように経済論的な語彙を用いて叙述され、心的エネルギーの備給、量なるものと近接する無意識とは、私たちによって意味として解釈することができるものなのか。この心的エネルギーは力、欲動、あるいは生命の奔流ともいえるものである以上、意味への翻訳を拒絶するのではないか。そのとき、前節でみてきたような、無意識を意識化して自己の人生史の再構築を目指す治療実践の前提は、切り崩される恐れがあるだろう。無意識のエネルギー論的位相である欲動の経済論と技法論は、どのように接続されうるのか。

この問いにこたえるために、再びリクルの精神分析論を参照したい。リクル (1965) は精神分析の特徴を、エネルギー論の語彙を用いて心的装置の〈力〉の葛藤を説明する〈力の語法〉と、そうした心的な諸力の葛藤により生成する夢や症状の隠された〈意味〉の関係を取り扱い解釈する〈意味の語法〉との混合語法にあると考える。このような独特の語法の成立を可能にするのが、フロイトの「欲動」概念である。

論文「欲動と欲動運命 (Triebe und Tribschicksale)」(1915)のなかでフロイトは、「欲動」とは「心的なものと身体的なものとの境界概念」であり、「身体内部に発し心の内へと達する刺激を心的に代表するもの (psychischer Repräsentant)」であるとのべる。その出自を身体にもち刺激と関連づけられる欲動は、明らかにエネルギー論的概念である (G.W., 10 : 214/全、一四 : 一七二)。さらに論文「無意識」には、次のような表現も見出される。「欲動は意識の対象には

決してなり得ず、欲動を代表する表象のみが、意識の対象になり得る (Ein Trieb kann nie Objekt des Bewußtseins werden, nur die Vorstellung, die ihn repräsentiert)」(G.W., 10 : 275/全、一四 : 二二四)。着目すべきは、「欲動を代表する表象」というフロイトの叙述である。

エネルギー論的概念である欲動は〈力〉の次元に属する。それに対して、「表象 (Vorstellung)」は私たちに解釈され理解される〈意味〉の次元に属する。一見すると接続しがたいエネルギー論と意味論という異質な両者を、なぜフロイトはともに語ることができるのか。リクールは、その理由はフロイトが欲動の定義そのもののうちに、〈力〉から〈意味〉への移行を可能にする〈代表 Repräsentanz/repräsentieren〉の機能を記入するからであるとのべる(1965:139=1982:146)。

私たちは、欲動そのものについては決して知りえない。しかし、〈力〉としての欲動は、自らを心的平面において代表し、心的代表として、「欲動を代表する表象 den Trieb repräsentierende Vorstellung」(G.W., 10 : 264/全、一四 : 二一一)として、〈意味〉の次元に到来する。つまり、無意識のうちにある〈欲動の心的代表〉という概念において、〈意味〉と〈力〉とが接続されるのである(1965:138=1982:146)。リクールはそれを、「欲動は自ら心的平面に向かって身体を魂の中で代表する、表現する」(1965:140=1982:147)ともいいかえる。この欲動そのもののうちにある〈意味〉へと向かう志向性に、リクールは「精神分析のもっとも基本的な公準」(1965:140=1982:147)を見定めるのである。

だがリクールは、ここで欲動の議論を終わりにしてしまわない。なぜならフロイトは、〈欲動の心的代表〉として表象のほかに「情動 (Affekt)」もあげるからである (G.W., 10 : 255/全、一四 : 二〇二)。フロイトは情動を「表象に付着していた欲動エネルギー」、あるいは「欲動代表の量的因子」ともいいかえる (G.W., 10 : 255/全、一四 : 二〇三)。こうした表現から推測されるとおり、情動は表象よりも明らかにエネルギーとしての〈力〉の次元に近接した概念である。情動が純粋に〈力〉の次元に属するものならば、〈代表〉の機能を保持する欲動が〈意味〉への志向性をもつという解釈は、完全に正しいとはいえなくなるだろう。

しかし、リクールはフロイトの記述から、情動における〈力〉の一元論を帰結として導き出さない。フロイトはときとして、情動を心的代表の「表象成分」と対立させて「量的成分」とよぶ (G.W., 10 : 258/全、一四 : 二〇五)。しかし、この「量的成分」は、「欲動が表象から離れてしまい、情動として感づかれるようになる過程で、その量にふさわしい表現を見出すというかぎりにおいて、このものは欲動に対応している (強調——引用者)」(G.W., 10 : 255/全、一四 : 二〇二)。その量にふさわしい表現を見出されなければ、情動は欲動と対応しない。この一文が、情動と〈意味〉の次元とををかりうじてつなぎとめる。

フロイトの情動をめぐる記述は、精神分析の根幹に関する重大な知見を提示している。リクールはそれを次のように解釈する。情動が欲動の量的成分としての代表である以上、「〈力〉の言語は絶対に〈意味〉の言語によって乗り越えられない」(1965:151=1982:156)。しかし同時に、情動が「その量にふさわしい表現」、あるいは「質的に色づけられた情動」(G.W., 10 : 256/全、一四 : 二〇三)への翻訳をとおして欲動と対応させられる以上、「この量は測定されるものではなく、診断や解釈に属するものである」(1965:146=1982:151)。したがって、「この純粋の経済論を、表象可能なものと言表可能なものとの外側で実感することはできない (強調——リクール)」(1965:152=1982:156)。いいかえれば、「精神分析は決してむきだしの〈力〉に直面せず、

常に〈意味〉を求める〈力〉と対面させる」(1965:153=1982:157)のである。

つまりフロイトは、〈力〉としての欲動の〈意味〉へと回収しきれない暗い性格、語られない性格とともに、この名指すことのできないものは、〈意味〉のほうへ、言葉のほうへ向いているということも、同時に見て取っていたのである。情動の分析をとおして、リクールは〈意味〉を求める〈力〉として解釈された「欲動」を、人間の自己の実存の〈意味〉を求める根源的な「欲望 (désir)」と捉えかえし、次のように言い表す。「欲望は名づけられないものであるとしても、それはもともと、言語のほうに向けられている。欲望は言われることを望む。それは言葉に潜在している。欲望が、言われないものであると同時に言いたいものであること、名づけられないものであると同時に語る潜勢力であること、これが欲望をして、器質的なものと心的なものとの境界にある臨界概念たらしめているのである」(1965:441-442=1982:503)。

ここにリクールは、分析の場に生成する、自己の実存の〈意味〉を求める精神分析の「主体」の根拠を見出す。そしてこれは、精神分析の実践とは、無意識の意識化を介した被分析者の人生史の再構築であるという前節の見通しと重なりあう。〈欲動の心的代表〉を中核に据えた第一局所論の「無意識」をめぐる精緻な議論は、実践の場に生起する営み、そして被分析者の特徴を、理論の言葉で明晰に写し取ってみせたものだったといえるのである。

〈欲動の心的代表〉を中核としたこの論点は、第二局所論にも引き継がれる。『続・精神分析入門講義』のなかには、次のような一節が見出される。「エスは、その末端が身体的なものに向かって開いており、そこから欲動欲求をおのれのうちに取り込みます。そして、この欲動欲求がエスのうちで心的表現として現れる (in ihm ihren psychischen Ausdruck finden) ことになるわけですが、これがいかなる基層 (Substrat) において起こるのかは分かっておりません」(G.W., 15: 80/全、二一: 九六)。欲動欲求がエスのなかで心的表現として現れる過程のうちには、欲動が〈意味〉として到来する〈代表〉の機能が想定されている。この欲動欲求から心的表現への移行がいかなる基層で起こるのかわからないとのべつつ、その事態を想定せざるをえないフロイトの振る舞いからは、〈代表〉の公準としての性格を見て取ることができよう。欲動の〈代表〉の機能によって、「無意識」や「エス」の有意義性が担保されるからこそ、自己の人生史の再構築としての精神分析は一貫して成り立ちうるのである。

3. エスの登場がもたらす理論と実践とのずれ

第一局所論の時期までのフロイトは、心的装置をめぐる一連の理論的探求をとおして、被分析者の人生史の再構築という実践の課題を、心的装置の審級間の働きとして明晰に写し取り言語化していた。しかし、フロイトの理論的探求はあくなき見解の修正へと向かい、1923年には「無意識」に代わり「エス」が、そして、死の直前には「エスの核」が論じられるに至る。これらの見解の変遷は、「無意識の意識化」を根幹とする精神分析の実践と理論とのあいだにいかなるずれを生じさせるのか。本章では、第一に、第二局所論を検討して、エスの登場が切り開いた理論地平と実践とのずれを明らかにする。第二に、フロイトの晩年の「エスの核」をめぐる発言を検討し、それが精神分析の実践に与える衝撃の深度を考察する。

3.1. 非人称のエス：第二局所論の理論地平

1923年の著書『自我とエス』において、フロイトは第一局所論に代わる第二局所論（自我・エス・超自我）を新たに導入する。フロイトが実際の臨床で観察した事例は、第一局所論の枠組みでは把握しきれない心の働きであった。分析の過程で被分析者は、抑圧されたものを想起するのに抵抗する。しかしその抵抗は、被分析者の自我から発しているにもかかわらず、その人自身には意識化されない。つまり、自我のなかに抑圧されていない無意識的なものが発見されたのである。これは、無意識を抑圧されたものとして捉える第一局所論では理解できない事態である。こうして第一局所論は、フロイトにより再考を迫られることになる。

『自我とエス』のなかでフロイトは、G.グロデック（Georg Groddeck 1866-1934）、およびF.ニーチェ（Friedrich Nietzsche 1844-1900）を参照して次のようにのべる。「われわれがわれわれの自我と呼んでいるものは、生において本質的に受動的な振舞いをしており、彼の言い方を借りれば、われわれは、見知らぬ統御しがたい力によって「生きられて」いる。……ここで私としては、知覚系に発し、まずは前意識的であるものを自我と呼び、それに対して、この自我と地続きでありながら、無意識的な振舞いをするこれとは別の心的なものを、グロデックの用語を借りて、エスと呼ぶことにしたいと思う」（G.W., 13: 251/全、一八：一八）。『続・精神分析入門講義』では、「無意識」から「エス」へと表現を改めた理由は、「この非人称代名詞は、自我から遠く離れている心のこの区域の主要性格を表わすのにうってつけのように思われるから」だと説明される（G.W., 15: 79/全、二一：九五）。

ドイツ語「es」は英語の「it」にあたる三人称単数の人称代名詞である。この語は、「雨が降る（ドイツ語：es regnet/英語：it rains）」や「1時だ（ドイツ語：es ist ein Uhr/英語：it is one o'clock）」のように、天候や時間を示す表現の主語として非人称的にも用いられる。フロイトは、無意識的な心的諸力をこの代名詞から造語された普遍名詞「エス Es」により呼び表すことを提案したのである。

フロイトがそうしたエスの用法の淵源として名指したニーチェによる『善悪の彼岸』（1886）のなかには、次のような一節が見出される。「思想というものは、〈それ〉が欲するときにやって来るもので、〈私〉が欲するときに来るのではない、したがって主語〈私〉が述語〈考える〉の条件であると主張するのは事実の歪曲である、ということだ。要するに、それが考える——（es denkt）——、だがしかしこの〈それ〉（es）をば、ただちにあの古くして有名な〈私〉だとみなすのは、控え目に言っても、一つの仮定、一つの主張にすぎないもので、ましてや〈直接的確実性〉などでは決してない」（1886=1993:40）。

ここで「それが考える」でさえいいすぎであるといわれるのは、「それ（エス）」は、いかなる名詞の代わりでもない代名詞、「主語ならざる主語」だからである。ある思想の着想という「事象自体」を言葉で表現するなら、「考える」という語を使うほかない。しかしそれは否応なく述語となり、それに呼応して「考える」の主語が、そして「考える」の主体が同時に語られてしまう。しかし思考や行為の「原因」としての「私」は、esを含めた何らかの主語を措定しなければ文を成り立たせることのできない文法法則から、誤って推論された幻想にすぎない。事象自体を言葉で表すことはできないという宿命をこえて、それでも言葉で表そうとした表現が「それが考える（es denkt）」だったのである⁴。

私たち人間は、明示しがたい力に突き動かされて行為をなしてしまうときがある。

行為の原動力であることは明らかなのに、それが何かは明言できないもの、これこそがフロイトのエスにはかならない。『続・精神分析入門講義』では、エスの特徴は次のように語られる。それはたとえるなら、カオスであり、煮えたぎる興奮の坩堝であり、いかなる編成も全体的な意志も形成しない。ただただ快原理に従い、欲動欲求を満足させることだけを求める。それどころかエスは論理的思考能力をもたず、矛盾律も当てはまらない。そうであるならば当然、エスは価値判断を知らず、善悪も道徳も知らない (G.W., 15 : 80-81 / 全、二一 : 九六―九八)。

こうして理論地平に導入されたエスは、これまで「意識」や「自我」と結びつけられていた「主体」の再考をも迫る。第二局所論という図式は、自我としての主体がエスを統御するといった静的な図式にはなじまない。自我は外的影響によりエスから分化したものの一部であるため、下方でエスと合流してひとつになっており、両者の区別を固定的に考えることはできない (G.W., 13 : 251 / 全、一八 : 一九)。加えて、エスが占めている領域は自我が占めている領域よりも「比べものにならないほど大きい」 (G.W., 15 : 85 / 全、二一 : 一〇三) 以上、エスに及ぶ自我の効力も随分とおぼつかない。その意味で、自我とは、「もっとも本来的な意味での主体」 (G.W., 15 : 64 / 全、二一 : 七六) ではあるのだが、その主体は心という「自分自身の家の主人ではない」 (G.W., 12 : 11 / 全、一六 : 五四) 主体である。ここに、デカルト的コギトとフロイトの自我とのあいだの大きな隔たりを明瞭に見て取ることができる⁵。

このように、フロイトの第二局所論においては、そもそも「私は誰か」という問いに応答すること自体が難しい。なぜなら、「私」という自我は、主語ならざる主語であるエスから分化した一部であり、エスに出自をもち大部分が無意識的である「超自我」に見張られており、それらの審級のあいだに明確な境界線を引くことは困難だからである。さらに、もともとはすべてであるところのエスが非人称の主語である以上、それらの審級を「私なるもの」に回収することも許されない。自我は決して、エスに先行しないからである。

エスが語る。夢や症状の分析をとおして解釈されたエスの言葉は、決して「私」が語った言葉として理解されてはならない。非人称のエスが語る事態とは、エスの言葉を決して私の言葉へと回収することなく、非人称のまま響かせ続けよ、いいかえれば、エスをエスのまま留まらせよ、ということの意味するだろう⁶。エスの登場によって、精神分析の理論と実践とのあいだには重要なずれが生じる。第二局所論は精神分析の実践に対して、かつてエスのあったところに自我を成らしめよという内容と、エスをエスのまま語り続けよという内容との、一見矛盾するような要請を同時に課することになるのである⁷。

3.2. 近づきたいエスの核

前節では、エスの理論への登場が実践へと課することになった、ずれをはらむ二つの要請を明らかにした。しかし、フロイトの眼差しは第二局所論にすら留まらない。本稿の冒頭でみたように、1938年、フロイトは「精神分析概説」のなかで、もともとはすべてであったところの「近づきたい核・エス」に言及することになる。その文章は、次のように続いていく。「しかしこの発展の間に、若くて力のない自我は、すでに受け入れた内容を再び無意識状態に戻し、それらを置き去りにし、自我が受け入れることができたかもしれない多くの印象に対しても同様の振舞いをしたために、それらは拒絶されて、エスの中にのみ痕跡を残すことができた。エスの

この部分を、われわれはその成り立ちを考慮して、抑圧されたものと呼ぶ（強調——引用者）」（G.W., Nb : 85/全、二二：一九八—一九九）。ここにきてフロイトは、「エスの二つの範疇」を区別する。「抑圧されたもの」と、一度も意識に浮上することなく留まり続ける「近づきたいエスの核」である。本節では、晩年のフロイトが辿りついたエスの思想が、精神分析の実践に対して与える衝撃を考察したい。

「抑圧されたもの・エス」は、一度、前意識状態に変わり自我のなかへと受け入れられたのち、自我により再びエスのなかに押し戻されたものである。したがって、この「抑圧されたもの」は、夢や症状、転移として再び回帰し、解釈することができる。つまり、エスのこの部分は、〈代表〉の機能を介して〈力〉と〈意味〉の双方の次元に属している。

それに対して、「近づきたい核・エス」とは、人の発達史において一度も浮上することなく留まり続けるものとされる以上、〈意味〉の次元に未だかつて到来していないものである。渡辺哲夫はこのエスの本性を、「言語的媒介以前、構造化以前、差異化以前、歴史化以前」と評する。さらにその「近づきがたさ」の理由を、それは回帰してこないだけでなく、回帰してきたと仮定しても意味不明だからであるとのべる（2007:320）。つまり、エスの核が登場するこの地平では、前節でみたようなエスの言葉をエスの言葉として聴き取ることが課題なのではない。ここでは、エスは語らない、あるいは、語るとしても、語られたことは意味不明である。

なおかつ渡辺は、フロイトの理論上の変遷には、のちのエスの二つの範疇へと結実する伏流があると指摘する。その開始点として渡辺が取り上げるのが、フロイトが1915年の論文「抑圧（Die Verdrängung）」のなかで言及した、「踏襲性抑圧」以前の「原抑圧 Urverdrängung」である。フロイトによれば、「原抑圧」とは、「抑圧の最初の段階（eine erste Phase）であって、それは、欲動の心的な（表象の）代表（der psychischen (Vorstellungs-) Repräsentanz des Triebes）が、意識的なものの中へと受け入れられることが不首尾に終わること」（G.W., 10 : 250/全、一四：一九七）である。そして私たちが本来いう意味での抑圧とは、原抑圧に続く「抑圧の第二の段階」、「踏襲性抑圧」（G.W., 10 : 250/全、一四：一九八）とよばれる。

この「原抑圧」とはいかなる事態を指した術語なのか。渡辺は、「原抑圧」という事態においては、「抑圧」する力も「抑圧」される出来事も不明なのだとのべる。ここで渡辺は、V.ヴァイツェッカー（Viktor von Weizsäcker 1886-1957）を参照して、「近づきたい核・エス」を「生命それ自身」として、「抑圧されたもの・エス」を「個々の生きもの」を舞台としてのみ思考しうる「生命」の特殊様態として理解する、次のような解釈を提示する。「原抑圧」とは、「個々の生きもの」（「自我」）が発生してくる際にその胎盤のごとき「生命それ自身」（「もともとはすべてであった・エス」）に応接し関係する深淵の動性それ自体にほかならない」（2007:322）。

自我という「個々の生きもの」がそこから発生してくる「生命それ自身」としての「エスの核」。そして、「生命それ自身」から「個々の生きもの」を発生させる「深淵の動性それ自体」としての「原抑圧」。このように捉えれば、生命それ自身である「エスの核」は、決して〈意味〉へと到来しない。さらにいえば、それは〈力〉から〈意味〉への志向性も、移行の可能性をももたないだろう。これは、第2章2節で確認したような無意識的なものの有意味性に担保された精神分析の成立を、根底から覆しかねない位相の話である。エスのうちに「抑圧されたもの」よりも「エスの核」がしめる比重を大きく見積もれば、精神分析の治療効果を否定する見

解ともなる。

しかし、渡辺とは異なる角度から「原抑圧」という事態を捉えることもできる。フロイトによれば、原抑圧では、〈欲動の心的代表〉としての表象が、意識のうちへ受け入れられることが拒絶される。フロイトはこれに続けて、無意識のなかで原抑圧に服した「当該の代表は不変のままに存続し、欲動は、その代表に結びついたままになる」(G.W., 10: 250/全、一四: 一九七—一九八) とのべる。第2章2節において、リクールの指摘を手がかりにして私たちは、フロイトが〈代表〉の機能のうちに、欲動の〈力〉から〈意味〉への移行を前提していることを確認した。したがって、無意識において欲動とその代表との結びつきを成立させる原抑圧とは、まさに欲動が〈力〉から〈意味〉へと移行する根源的な事態をあらわしていると解釈できないだろうか。

先に引用した文章に続けてフロイトは、踏襲性抑圧は、原抑圧された代表からの心的な襲か、あるいはそれとの連想関係をもつに至った思考系列に対して向けられるとのべる (G.W., 10: 250/全、一四: 一九八)。つまり、原抑圧という事態によって欲動が〈力〉から〈意味〉へと代表されているからこそ、被分析者は踏襲性抑圧に服したものの解釈をとおして、自己自身の実存の〈意味〉の獲得へと至ることができるのである。さらにフロイトは、「無意識の核」とは「欲動代表」であるとも述べていた (G.W., 10: 285/全、一四: 二三四)。この無意識の核としての欲動代表こそ、原抑圧により生じる最初の欲動とその代表との結びつきなのではないか。かつそれが「エスの核」という表現に流れ込んでいるとみるならば、フロイトの晩年のエスの思想は、エスの有意味性を否定しない見解として解釈することもできよう。つまり、「エスの核」とは、原抑圧により生じる最初の欲動代表を指しており、これこそ精神分析の実践の成立を可能にする、欲動の〈力〉から〈意味〉への根源的な志向性をあらわしているのである。

しかし、本稿で可能な作業は、「原抑圧」や「エスの核」についての理解を確定させることではなく、「エスの核」についての異なる二つの解釈を提示することで、フロイトのこれらの発言が、精神分析の実践に対してどれほどの衝撃を与えうるかを確認するところまでである⁸。フロイトが死の前年に到達したエスの思想は、彼がそれまで築き上げてきた精神分析の実践や心理学理論の前提を、根底から覆しかねない破壊力を秘めていたのである。

4. 結語

フロイト精神分析における理論内でのずれ、そして理論と実践とのずれの解明に焦点を当てた本稿の考察から得た見取り図を振り返ってみたい。実践のなかで、被分析者による人生史の再構築の仕事に取り組み続けていたフロイトは、〈欲動の心的代表〉を中核に据えた第一局所論によって、自らの治療実践を明晰な心理学理論の言葉で語ってみせた。しかし、第二局所論は実践に対して、エスのあったところに自我を成らしめることと、エスをエスのまま語り続けることとの、一見矛盾する二つの要請を課すことになった。さらに、フロイトが晩年に辿りついたエスの思想は、私たちが第3章1節まで考察してきたような、彼がそれまで築き上げてきた心理学理論と治療実践とともに根底から覆しかねない解釈を許すものであった。

こうした探求の成果のうち、私たちに重要な問いを提起するのは、第二局所論と技法論とを並べることで見出される、精神分析における理論と実践とのずれである。第3章1節で確認し

たような、第二局所論が実践に課すエスをめぐる二つの要請は、はたして矛盾と形容できるほどのものなのか。一方でフロイトは、私は私の心の主人であるという思い上がりこそが、自己の疎外を生むことを指摘していた（G.W., 12: 11/全、一六: 五四）。「自由連想法」や、分析家とのあいだの転移、あるいは夢や症状の解釈から自己を理解するという精神分析の原則は、私に先行するエスの声を聴き取るために編み出された手法であるといえるだろう（エスをエスのまま語り続けよ）。他方で、エスの非人称的性格を認識したとしても、この「私」の実存の〈意味〉の欠損が解消されるわけではない。臨床家フロイトが日々向き合っていたのは、常にほかならぬこの「私」の実存の〈意味〉を喪失して苦しむ人々であった。さらに、治療実践という営みが社会のなかにその場をしめる以上、無道徳のエスから生じる行為の帰結の責任を、結局は「私」が背負わなければならないだろう（エスのあったところに自我を成らしめよ）。

私たちは夢や症状の解釈をとおして、エスの言葉を聴き取ることができる。しかし、「エス」が「私のエス」ではない以上、エスの言葉から再構築されたひとつの人生史を、「私」はなぜ、「私の人生史」と同定することができるのだろうか。本稿の議論を準備作業として問うべき課題とは、非人称のエスの声を聴き取ったうえで構成される、それまでの「私」とは異なる新たな〈私〉とはいかなるものか、さらには、「私」から〈私〉への変容を可能にする実践のあり方、あるいは〈私〉の自己理解を可能にする物語制作のあり方とはいかなるものかについて、フロイトの言葉のうちに探り析出することであるだろう⁹。

註

¹ 櫻井一成によれば、リクールは精神分析における解釈の行為を「物語の制作」として再定式化したという（2014:53）。精神分析における「物語制作」の具体的契機を、リクールは被分析者の〈反芻処理〉に見出している。論文「フロイト精神分析における証明の問題（The question of proof in Freud's psychoanalytic writings）」のなかでリクールは、「自己自身を了解するという課題は、自己自身の歴史を物語る能力、そして、絶え間なく反省に物語の形式を与え続ける能力を回復するという課題である。反芻処理とは、この連続した物語りにほかならない（working-through is nothing other than this continuous narration）」（1977:862）とのべている。

² 金関猛によれば、フロイトはこうしたエネルギー論を、大学時代の恩師 E.ブリュッケ（Ernst von Brücke 1819-1892）もそのメンバーに含まれる、ヘルムホルツ学派から受け継いだ。脳が「物理化学的な力」によって作用するのと同じように、それと連関する心もある種の心的なエネルギーによって働く反射装置として想定できると考えたのである（2015:18-25, 76-84）。

³ フロイトが「無意識の核」として名指した「欲動代表」こそ、〈意味〉の次元と欲動をつなぐ重要な概念である。本節後半での「欲動」の〈代表〉の機能の検討をふまえて、第3章2節でも、「無意識の核」と「エスの核」との連関を検討する。

⁴ 以上のドイツ語の「es」、およびエスをめぐるフロイトとニーチェの関係についての記述は、互盛央（2016:12, 35-39）、金関（2015:197-202）を参照した。

⁵ デカルト的コギトとフロイトの自我について、リクールは精神分析論のなかでそれぞれの特徴を丁寧に描出している。直接知覚される意識を自我と同一視するデカルト的コギトを、リクールはナルシシズムに根ざし意識の至高性を手放さない〈いつわりのコギト le faux Cogito〉（1965:413=1982:471）とよぶ。それに対して、精神分析の実践に生成する主体とは、フロイトの無意識の実存論を認め、自己愛への侮辱を受け止めた〈傷ついたコギト Cogito blessé〉である。〈傷ついたコギト〉は、「現実の意識の不十全性、錯覚、虚偽を自認すること」によってしか、自己を指定できないコギトである（1965:425=1982:473）。

⁶ 西洋思想史のなかの「エスの系譜」を丹念に描き出した互盛央（2016）は、エスの系譜のう

ちに、主語ならぬ主語であるエスの実体化を避け、エスに沈黙を課しながら語り続ける第一の系譜と、エスという主語ならぬ主語を「私」、「私たち」、あるいは「市民」や「国民」という主語にすり替えてきた第二の系譜を指摘している。互によれば、たとえエスを語るとしても、「それが考える (Es denkt)」を、「それが私の中で考える (Es denkt in mir)」にすり替えてはならない。なぜなら、エスの第二の系譜である後者のロジックでは、「私」をエスに先行するものとして定立し、結局「私」を強化することにつながってしまうからである。

⁷ 本節の検討をふまえてリクールのフロイト解釈を捉えたとき、リクールはエスの非人称的性格を十分に考慮に入れず、エスに先行したものとして、自己の実存の〈意味〉を求める〈傷ついたコギト〉を措定しているともいえるだろう。しかし、これはリクールのフロイト解釈が、第一局所論と技法論との接続に焦点を当てているためである。またリクールの論述には、エスについての二重の要請を視野に入れた発言も見出される。註9も参照。

⁸ 渡辺は「エスの二つの範疇」へと至るフロイト理論の伏流として、「原抑圧」論のほかにも、『快原理の彼岸 (Jenseits des Lustprinzips)』(1920)のなかの「反復強迫」から「死の欲動」へと至る論を指摘している(2007:320)。「原抑圧」については、「死の欲動」との連関について検討したうえで、いずれ稿を改めてしっかりと論じたい。

⁹ たとえばリクールは、その〈私〉を「解釈学的意識」と捉え、その意識の生成は、「〈自分のもの〉としての無意識を〈もつ〉この意識を放棄する」ことによる「恩恵」であるとのべる(1965:419=1982:477-478, 1965:424=1982:483)。

引用文献

訳出に際しては邦訳を参照しつつ、適宜改訳した。

[フロイトの文献]

※フロイトの文献からの引用は、以下の省略記号(版、巻：頁)を用いて引用箇所を示す。

G.W.=Gesammelte Werke: Chronologisch Geordnet, 18 Bde., Bde. 1-17, London: Imago Publishing, 1940-52, Bd. 18, Frankfurt: S. Fischer, 1968.

全=新宮一成・鷺田清一他訳『フロイト全集(全22巻)』岩波書店、2006-2012.

[その他の著者の文献]

金関猛 2015『ウィーン大学生フロイト——精神分析の始点』中央公論新社

櫻井一成 2014「リクールの精神分析論——自己理解の解釈学の展開における因果性と客観性——」、『美学藝術学研究』第32号、19-72

互盛央 2016『エスの系譜——沈黙の西洋思想史』講談社

ニーチェ、フリードリヒ 1993『善悪の彼岸』信太正三訳、『ニーチェ全集』第11巻、筑摩書房
(Nietzsche, Friedrich 1886 (1999), *Jenseits von Gut und Böse: Vorspiel einer Philosophie der Zukunft*, C. G. Naumann, 1886; in *Sämtliche Werke*, 5, Kritische Studienausgabe, de Gruyter, 1999)

Ricœur, Paul 1965, *De l'interprétation. Essai sur Freud*, Seuil, Paris (P.リクール 1982『フロイトを読む』久米博訳、新曜社)

—— 1977 “The question of proof in Freud’s psychoanalytic writings”, *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 25, 835-871

渡辺哲夫 2007「解題」『フロイト全集』第22巻、303-326、岩波書店

(臨床教育学講座 博士後期課程1回生)

(受稿 2017年8月31日、改稿 2017年11月20日、受理 2017年12月20日)

非人称のエス

ーフロイト精神分析における理論と実践のずれをめぐってー

後藤 悠帆

本稿の目的は、S. フロイトの「エス」概念に着目して、精神分析の理論上の変遷に見出される「ずれ」と、そのような理論と実践とのあいだに見出される「ずれ」を明らかにすることである。第一に、精神分析の実践とは、〈反芻処理〉、すなわち、無意識の意識化を介した自己自身の人生史の制作作業であることを示す。第二に、〈欲動の心的代表〉を中核に据えた第一局所論が、精神分析の実践を明晰に理論化している点を明らかにする。第三に、第二局所論への移行は実践に対して、エスのあったところに自我を成らしめることと、エスをエスのまま語り続けることとの、一見矛盾する要請を課すことを示す。最後に、最晩年のフロイトが見通した「近づきたいエスの核」の含意を検討する。考察の結果、非人称のエスの声を聴き取ったうえで構成される新たな〈私〉、さらにはそうした〈私〉への変容を可能にする実践のあり方の解明が、次なる問いとして導き出される。

Impersonal Es: On the Gap between Theory and Practice in S. Freud's Psychoanalysis

GOTO Yuhu

The purpose of this paper is to clarify the “incoherence” between theoretical transitions of psychoanalysis and the “gap” between such theory and practice, focusing on S. Freud's concept of “Es.” First, I indicate that the practice of psychoanalysis is understood as what Freud calls “working-through (Durcharbeiten),” through which a person creates his or her own life history by making what is unconscious conscious. Second, I show that the practice of psychoanalysis is clearly theorized by Freud's first topography in which he connects the practice and theory of psychoanalysis by the idea of “Psychic representative of drive.” Third, I show the problem caused by Freud's transition from his first topography to his second topography. In the second topography, the theory of psychoanalysis imposes contradictory requests on the practice: we have to make Es ego, but on the other hand, we must not understand Es's voice as ego's voice. Finally, the paper examines the implications of “Es's scarcely accessible nucleus” suggested by Freud in his later years. Elucidation of the new “I” constituted by listening to the voice of impersonal Es and a practical means of enabling transformation to such “I” are found as new questions.

キーワード： 理論と実践、反芻処理、代表、エスの核

Keywords: Theory and practice, Working-through, Representative, Es's nucleus